



変化を恐れず好奇心を糧に生きる

柴生田 晴四
(経済倶楽部理事長)

日本に定着したのかと考えてみると、おそらく官庁や学校の制度が定着した明治以降でしょう。

ちなみに企業の決算期は、3月期がもともと多かったとはいえ、70年代までは業種によつては3月以外の決算期もかなり存在していました。商法が改正され、企業が総会屋対策にこぞつて決算期変更に走るまでは。

▼東京大学が9月入学への移行を打ち上げて話題になりましたが、その後これが具体化するという話にはなっていないません。大学関係者によれば、欧米だけではなく、アジアの国々でも学校は9月入学がほとんどで、日本の4月入学が留学生の受け入れに少なからず障害になっているそうです。私立大学の中には、

▼4月といえば、学校や企業、官庁など多くの組織が新年度入りします。新聞やテレビでも、大手企業や大学の入社式や入学式を報道しますし、なんとなく社会全体が浮き立つような季節を迎えたような気になるから不思議なものです。3月から5月にかけては桜前線が日本列島を北上しますから、そうしたことも、こうした季節感に影響しているでしょう。しかし、いつから4月1日が新年度として

9月入学の受け入れを進めているところもありますから、制度全体を変えなくとも対応はできるのかもしれない。しかし、必要に応じて柔軟に制度を変えることの難しい社会だということを感じさせられます。特にお役所がからむと改革はとて困難です。入学試験が冬でなく夏になれば大雪に悩まされたり、インフルエンザにかかることを心配しなくてもよくなるでしょうに。

▼前例を踏襲することにこだわっていたら企業は生き残れません。時代の変化と市場の動向を敏感に捉えて、自らの組織と方向を常に修正していなければ、思わぬ窮地に立たされることになるでしょう。企業だけでなく、硬直化し、若さを失った組織はやがて社会から

取り残されて存在意義を失うことになるでしょう。

▼人間も歳と共に保守的になり、変化を好まなくなるといわれます。しかし、社会に関心を持ち続けることによつて若さは保たれるのではないのでしょうか。好奇心こそが若さの糧であるといえるかもしれません。高齢化社会が到来しても、高齢者が先頭に立つて社会の不合理をただし、若い世代が伸び伸びと働き、力を発揮して生きていける社会をつくることができれば、日本は「先進国」であり続けるでしょう。

願わくば、若い世代の足を引っ張るのではなく、背中を押してあげられる存在でありたいものです。